

ときめき インタビュー



…プロフィール…

1974年1月26日東京生まれ。2005年越谷市に移り住む。1993年、投稿作品が講談社のコミック誌『アフタヌーン』主催の四季賞佳作に。その後漫画家・藤島康介氏に師事。2000年12月、イラストでプロデビュー。2002年1月、『Living Quarter』で漫画家デビューを果たす。以来、アニメや映画にもなった人気シリーズ『魔法遣いに大切なこと』、『フレフレ少女』などの作画を手がける。2008年9月、初の画集も発行された、いま注目の漫画家。

作品のイメージがふくらむ 越谷市の豊かな自然

市内北部、閑静な住宅街の一角に、若い人たちを中心に人気を集めている漫画家・イラストレーター、よしづきくみちさんのスタジオがあります。

姓はよしづき、名はくみち。変わったペンネームですね、というのと、「特に深い意味はありません。音の響きのおもしろさからいつのまにかこの名前になりました」

スタジオを越谷市に移して3年。交通の便もよく、駅前は思っていた以上に何でもそろっている。越谷はお気に入りのまちのようです。

「作品の中に自然を描くことが多いので、趣味のバイクで群馬や長野の山に出かけるにもバランスのいい場所なんです。市内にも自然は多いし、県立大学あたりには大きな風景があります。だから、ここを動かさなくてもいいですね」

スタジオで6人のアシスタントと同じ釜の飯を食べながら、若者の心を癒すよしづきさん独特の優しい色使いのキャラクターたちが、次々に誕生しています。

プロの厳しさを学んだ アシスタント時代

よしづきさんは19歳のとき、漫画家への登竜門となる賞を受けたのがきっかけで、人気漫画家・藤島康介氏のアシスタントとしてプロへの道を歩きはじめました。そこは、修業の場というより、いきなり資料を渡されて、「これを描いて」という実戦の場でした。

当時は手で描く時代からパソコンで絵づくりをする時代への移行期。絵の具で四苦八苦した経験は今でもよしづきさんの作品づくりに役立っているそうです。しかし、そうした技術的なこともさることながら、原稿づくりに対する意識的なものを学んだことの方がもっと意義があったといいます。

「プロとアマの違いは、どの水準で自分自身が満足するかですね。レベルを突き詰めてはじめてプロの原稿になる、ということを学んだことが一番の収穫でした」

まあ、この程度でいいか、と自分で安易な合格点を出せば、自身の首を絞めることになる厳しいプロの世界で、よしづきさんはやがて頭角を現して行きます。

漫画家は演出家でありカメラマンであり脚本家

技術も身につけ、そろそろ一人立ちできるかなと思いはじめたとき、『魔法遣いに大切なこと』（原作・山田典枝さん）の漫画化の話が出版社から舞い込みました。よしづきさん28歳のときのことでした。

原作者と相談しながら、主人公の魔法遣い・菊池ユメのキャラクターがつくられました。

原作（脚本）を独力で構成していく漫画家は、映画やドラマの演出家やカメラマンの役割を一人で

2008年は作品がアニメ化や映画化もされた。2009年はさらにチャレンジしてみたい。

こなすようなもの。よしづきさんのみずみずしいイメージから生まれた可愛い魔法遣いは、たちまち中高生から20代の若者たちに受け入れられ、2003年にはテレビアニメ化。女優の宮崎あおいさんが主人公の声を演じました。

「魔法遣いに大切なこと」は、実写版で映画化されるほどの人気シリーズとなっています。

『フレフレ少女』は高校の応援団の取材から生まれた

映画化されてから漫画になった『フレフレ少女』は、春日部高校

応援指導部の取材を通して生まれた作品。女の子を主人公にすることで、古めかしい世界を現代にマッチさせたかったとのこと。

「2009年は物語の原作づくりをはじめ、さらなる挑戦をしたい」よしづきさんのスタジオからどんな新しいヒロインが生まれるのか、楽しみです。



漫画家・イラストレーター よしづきくみちさん

「大きくなったら漫画家になりたい」。小学校の卒業文集に将来の夢を描いた少年が、夢に向かって走り続けた一本道。よしづきくみちさんが描く世界は、殺伐とした世相にあって、読者の心を優しさで満たす不思議な力を持っているようです。その創作の原点などをスタジオにお邪魔して伺いました。